

死と向き合って

乾 陸音 明德義塾高2年

近年、少年少女の自殺事件

が後を絶たない。亡くなった彼らは死をいかに捉えていたのだろう。私は自分の死後を想像すると、例えようのない恐怖心に駆り立てられる。なぜなら私には、死に対する覚悟がないからだ。

そんな私に比べ、自ら死を選ぶ勇氣はある意味、恐ろしいものだ。「なぜ死に向かう勇氣を、先の現実に向けないのか」という疑問を私に抱かせ

る。

私も過去にいじめを受け、自分の口から「死んだ方がまし」という言葉を親に向けてはいたほどであった。しかし、死には救いなどなく、家族の後悔や周りの人の罪悪感を生む負の波紋を広げるだけなのだ。

私は過去にいじめを受けた悔しさを原動力に変えて前へ進んでいきたい。

今日、世界では新型コロナ

ウイルスへの感染や、ロシアとウクライナ間の戦争で多くの人々が亡くなっている。言い換えれば、生きたくても亡くなってしまう人がいるということだ。

このような状況下で自ら命を落とすという選択肢は、あつてはならない。これからの社会を担っていく子どもたちは、もつと死を深く考えてほしい。